「生きることに手間をかける」人

石川早苗第二詩集『蔵人の妻』に寄せて

1

石川早苗さんの第一詩集『アマテカレイ』を読んでいると、難病を抱えて身体の機能の低下があるけれども、逆に精神力が逞しく強靭になっていく不屈な人間の姿を見出し、とても勇気づけられる思いがする。人は病んで苦しみ絶望さえするが、それゆえに病を抱えながら健康であることを奇蹟のように感じて、深く他者や生きとし生けるものに感謝する存在でもあることを石川さんの詩から教えられる。石川さんは愛知大学の学生時代の二十歳の頃に膠原病だとわかった。そしてその病を抱えて就職するのも大変だったそうだが、それでも就職し仕事をこなしてきた。膠原病は免疫機能が自分の身体を攻撃してしまう「自己免疫疾患」という難病だと言われている。しかし入退院を繰り返しながらも人の役にたてることはないかと「全国膠原病友の会」の運営に関わり、愛知県支部の会報「山びこ」の編集を十年も担当していた。また結婚し岡山県総社に暮し始めてからも「まちづくり」というプロジェクトに参加し、ライター兼イラストレーターとして才能を発揮している。また良き伴侶を得て日々の暮らしを大切にする生き方をされている。その暮らしぶりから生まれたエッセイ集やボタニカルアート（植物画）は、野菜作りとその野菜料理のレシピなど、手作りの暮らしが淡々と書かれ描かれている。限られた条件の中で生きることで自然の恵みを感じ、様々なまわりの存在が輝きを増してくることを伝えている。

石川さんの第一詩集『アマテカレイ』は四十歳の時に刊行され、二十六篇が収録されている。あとがきによると、罹病して二十年の区切りとしてまとめられたという。一章「ひぐらしパン」の十篇は石川さんのライフスタイルが描かれている。冒頭の詩「手間をかける」は石川さんの大切にしている生きるリズムが感じられる。

手間をかける

土筆のハカマをとる
ゆがいた蕗のスジをむく
蕨のあくを抜いて
米ぬかで筍を茹で
えんどう豆をさやから外し
洗った玄米から籾を拾い
傍らのコンロでは
ヘタをとった苺がはちみつとコトコト
夕方には酸っぱいジャムに
なるだろう

手の間、と書いて
てま、と読む
これらの手間はすべて
食べられる彼らが
そして食べる私たちが
お互いの命を全うするために
必要な手順
「ある事のために費やす時間、また労力」
と辞書にはあるように
食べ物だけとは限らないけれど
その過程を楽しみ
味わうのでなければ
本当の意味はわからない

私の手と手の間で
エネルギーは変換され心に還る
繰り返すその作業は
解き明かされる言葉にも似て
いのちのリズムを
身体に刻み込ませていく

だから
面倒がらないで
かける心を省かないで
母が
祖母が
そうしてきたように
食べることに手間をかける
食べられることに
手間をかける

そして
生きることに手間をかける

石川さんの「私の手と手の間で／エネルギーは変換され心に還る」という言葉には、とてもシンプルな「生きるリズム」の哲学が宿っている。手と心がまっすぐに繋がっていて、いつもそれは試されていることに石川さんは自覚的なのだろう。多くのことを断念させられた果てに石川さんは、人にとって最も大切なことが何であるかを告げている。私は石川さんのような詩作の態度にこそ切実に詩を求めている本来的な詩人の姿を見出すのだ。

石川さんの見詰めているものは、私たちが物を消費する命

の営みの奥底に透視されてくるものだろう。「これらの手間はすべて／食べられる彼らが／そして食べる私たちが／お互いの命を全うするために／必要な手順」だという考え方は、命をいただいて自分の命を永らえるという生命観がある。物を食べる時に飽食の現代人が忘れ去っていることを石川さんは痛切に思い出させてくれる。あたかも宮沢賢治が大地や宇宙からエネルギーを受け取り、その中で人間が生きていることを詩や童話で表現し自らの生き方で試みたように、石川さんも岡山の総社という場所で詩を生きているのだと私には感じ取れる。スーパーマーケットやコンビニエンスストアに慣れてしまった現代人は、利便性のおかげで本当の物に出会っていないのではないか。物を手作りすることで物との関係に込められている「手間」という豊かな時間から遠く離れてしまっているのではないか、と石川さんは静かに語っている。物への感謝する素直な気持ちを忘れ去った人間の傲慢さを、石川さんから告げられた思いがする。石川さんの生まれた一九六五年頃は高度成長の真最中だったし、子供の頃や学生時代は日本の経済的な繁栄の時代だった。けれども石川さんはそんな時代の流れとは逆に真に大切なものとは何かを探していたに違いない。学生時代に知らされた病気を契機にして、自分の宿命を受け入れて病を生涯の友として生きようとしてきたのだろう。

2

二章「病院大奥」のなかの詩「病院大奥」には、石川さんの逆境の中でも他者への思いやりと感謝、そして批判精神も失わずにその場所をより良くしていこうというエスプリが宿っている。

病院大奥

その暗くて長い廊下を
まっすぐ行くと
突然明るい一角にたどり着きます
お揃いのユニフォームの
若くてかわいい腰元にかしずかれ
パジャマ
ネグリジェ
スウェット姿の
熟女
コギャル
ただのオバさんが
たくさんの小部屋のベッドに
詰め込まれて
殿のお渡りを待っている

使われる言葉は
ぷれどにん
ぺるさんちん
しんちぐらふぃ
えりてまとーです
下々の者にはわかろう筈もなく

「今日は大殿（主治医）は
お渡りにならぬか」
「私のほうは若殿（担当医）だけが
お見えじゃ」
「えりてまとーですのほうは
どうなっておるのでしょう？」
「宿下がり（外泊）のご相談を
せねばならぬのにのう」

ここは病院大奥
外界とは異なる時間が
ゆっくりと流れる
政治も
戦争も
社会の喧騒は
入り込む余地などないが

病を宿したこのいのち
しっかり抱えていないと
すぐに落としてしまう

如何ですか
一度おいでになりませぬか？
貴方が知らないだけで
確かに存在するこんな世界
はまったら
なかなか抜け出せません

江戸時代の大奥と入院病棟を重ね合わせた発想は、読む者が意表を突かれ病院のイメージを変えさせてくれる。難病ゆえに時々入院することになった馴染みの病棟を積極的に受け入れてしまう石川さんの強さを感じる。この強さはきっと難病に対して言葉でもって反撃しようとする詩人の言葉のしなやかな感受性なのだ。雨や嵐の中でも野の草がその力を吸収してしまうようにありたいと願っているのだろう。深刻な情況を抱えながらも、その情況を外側から見詰めて緊張を緩和させるユーモアを取り戻そうとする強靭さを、私は石川さんの詩に感じる。押し寄せる試練を石川さんはこのしなやかな感受性によって対峙し切り抜けていくエネルギーを示している。

また石川さんの視線は、医者や看護師たちの存在が患者たちから見られていることを気づかせてくれる。そして医療現場を患者と医療スタッフの双方が本来あるべき方向へ変えていく希望を感じさせる。深刻な現場だから少しでも居心地のいい場所になるように、患者の心理を重んじた患者のためのケアの場所へ変えて行こうとする思いが、石川さんの中で湧き上がっているのだろう。自分一人のことだけでなく多くの入院患者たちの思いを石川さんは汲み上げようと試みる。このような視線や発想で書かれた詩篇は今までほとんど存在しなかったのではないか。その意味で石川さんの詩篇は、誰もがいつかお世話になる病院暮らしの未来のことを、私たちに先取りして提示しているのが特徴なのだといえる。

3

第二詩集『蔵人の妻』は二十九篇が収められている。一章「逃げる男」十八篇の冒頭の「逃げる男」は、古事記の国生み神話のイザナギとイザナミの物語に触発されて書かれたものだ。石川さんは大学で中国文学を専攻していて荘子などの古典に特に関心があったと聞いているが、古事記などの日本の古典の中に現代にも通ずることを感じていたのだろう。

逃げる男

甘い睦言も
まっすぐな眼差しも
みんな嘘——

逃げていくような男なんて
いっそのこと
見捨ててしまえ

と言われたのだが
そのようにできず

つくるばかりで
責をとらない子供ばかりを
次々と受け入れた
千人も

いつかまた逢える
疲れた者は
皆ここへ還ってくるのだもの

好きなだけ逃げればいい
女は待つ

追いつめてはいけない
男には逃げ道をひとつ
残しておいてあげなくては

と言われたので
そのようにしたら

本当に逃げていってしまった
不意に蘇る
遠い遠い記憶
あのとき黄泉比良坂で
あなたはやはり
怯えて逃げた
私の中に蠢くものから
髪飾りの蔓草
爪櫛の歯
長剣
桃の実
そして
千引きの岩
追いすがる私を
何度も何度も捨てた男
「どんな君でも愛する」

闇く温かい混沌の中で

私はこの詩を初めに読んだ時に、「逃げる男」の不誠実さを軽く揶揄しているようだが、何を言いたいのかよく分からなかった。しかし二度三度、繰り返し読んでいるとその軽さが消えてきて、実はこの詩が男女の問題や生死の問題を共に掬い上げようとしている重たい詩だと私には思われた。古事記の神話とは逆に男が彼岸へ逃げると解釈してみたのではないかと思われた。「どんな君でも愛する」と語った男はそれを実現しないで女を置いて彼岸へ逃げてしまった。けれど女はその言葉を今でも信じているが、自分とは異なる世界へ逃げて行き「嘘」をついたと男を責め続ける。けれどもそこから石川さんは女としての想像力を発揮していく。彼岸へ逃げていった男の「つくるばかりで／責をとらない子供ばかりを／次々と受け入れた／千人も」とは、きっと男社会が生み出した戦争孤児や破壊された物事やまた子供に還った親たちも指しているのではないか。また「受け入れた」とはそれらを時間をかけて癒すことや介護をも意味しているのかも知れない。「いつかまた逢える」とは権力闘争や仕事に疲れた男たちがまた女たちの場所に帰って来ることを予見しているのだろう。石川さんは「好きなだけ逃げればいい」と言い、「女は待つ／闇く温かい混沌の中で」と決して「逃げられない女」たちの心情を代弁しようとしたのではないか。石川さんは二十五歳

の時に恋人を亡くしたと一章の詩「台所にて」に記している。その辛い経験から、彼岸から疲れて帰ってくるまでいつまでも「女は待つ」ことができると想像していく。男女の問題を生死の問題に関連づけて考えている。そして世の男たちに「どんな君でも愛する」など甘言を吐くなら、彼岸に超越しないで生き続けて責任を取らなければならないと、言葉の重さを突きつけている。このような言葉と行動を一致させようとする願いを持ち真剣に生きている詩人は、今までにない詩篇を生み出す可能性が高いだろう。この「逃げる男」は、私の解釈以外にも多くの自由な解釈が可能であり、読む者に男女の世界を通して、神話と彼岸の深層の世界に遊ばせることができる興味深い詩篇だ。次に詩「台所にて」を引用してみる。

台所にて

ある日唐突に
恋人を喪った

存在しなくなった
二人の未来は
ぽっかりと冥い穴
人にも
終わりがあるのだ

麻痺した心
私は二十五だった――

それから二十年近く
家を成した私は
毎日掃除洗濯をし
米を研いでいる
繰り返される暮らし
その何気なさに
ときどき手がとまる

終わりはいつ来るのだろう
明日か
ずっと先か
喪われるのは相手か
それとも私か

ならば
今を
今こそ
朝食も夕食も
「おはよう」や
「おやすみなさい」や

日々繰り返す喧嘩でさえも
舐めるように味わわなくては
米をぐっと摑む
そのまま息を止め
狂ったように
何度も何度も
研ぐ

この「台所にて」を読むと、死者に促されて人がより良く生きるために努力しようとする精神の在り方を感ずる。だからこそ今の掛け替えのない伴侶との暮らしを精一杯生きようとする姿がこの詩に純粋に定着されている。死を覚悟して生きることは本来的だが、多くの人は死を忘れて生きていることが一般的な日常だろう。石川さんは誰よりも死を覚悟して時間の有限性を意識し、現在という時間だけでなく、過去・現在・未来という時間が重層的に混ざり合う根源的な時間を生きようとしているのだろう。このような緊迫感を持つからこそ「台所にて」のような詩が台所で生まれてきたのだと考えられる。石川さんはもしかしたら自宅さえも病室であるように思い、社会全体も巨大な病棟のように感じているのではないか。人が生きるとは、何らかの病を抱えながらも、自分の時間をいかに本来的なものに近づいていくかを試されているのだ、と読む側に語りかけているように思われる。

4

詩集のタイトルにもなった「蔵人（くらびと）の妻」には現在の等身大の石川さんの暮らしが描かれている。蔵人である夫は、酒造りのプロであり、時に妻を忘れて酒造りに没頭する職人である。酒造りの時間は人間を超えた神々しい時間なのかも知れない。疲れた身体で妻の話や「文句」を聞きながら眠ってしまう夫婦の日常の情景が、なぜか心に残りいとおしくなってくる。

蔵人（くらびと）の妻

帰ってくるなり
その話だった
今日搾った酒は
立ち香が素晴らしかった
味にも幅があっていい酒になった
けどそのあと粕をはがすのに
手間がかかって
それから火入れだもの
忙しいのなんのって
遅い夕食
忙しく箸を動かす夫からは

甘い発酵の香りが漂う

じゃあ今度は私ね
うん
近所の子供が遊びに来てね
うん
それから畑の小松菜が
うん
ウチの猫が野良と喧嘩をしてね
……
返事が途切れ
こっくりこっくり
手から落ちる箸――

起こすべきか
起こさざるべきか
好きな仕事に打ち込んで
幸せそうに疲れている我が蔵人
しかし妻の話を聞かないとは
ケシカランではありませんか
仕込みの続く半年間
ずっと一方通行なんて
私、家政婦じゃありませんことよ

一呼吸おいてから起こし
風呂に追い立てる
後で背中を踏みながら
たっぷり文句を聞かせようか

蔵人の妻の
忸怩たる想い
しかし発酵の香りは
好きなのである

夫は酒造りの蔵人であり、職場では手造りを重んじて原料となる山田錦という酒米作りから始めるという。石川さんは夫と出会い酒の世界に魅せられる。そして酒造りの手間を生きている蔵人たちの時間を詩で記そうと試みる。例えば蔵人たちの作業を詩「蔵は眠らない」で次のように記している。「酒造りに専心する蔵人たち／仕込みに入れば／温度も湿度も時間でさえも／酒の都合が最優先である／麹室は室温三〇度／みな半裸になって／蒸米に麹菌を種付け／壁を隔てた仕込蔵では／いくつも並んだタンクが／冷気をまとい／　ふつふつ／　ふつふつ／発酵する酒に／杜氏（とうじ）が耳を傾けている／／米を浸漬したり／蒸したり切り返したり／蔵の仕事は水仕事／搾りを終えて／タンクをきれいに洗う／皆造日まで／蔵は眠らず／蔵人の手は／あかぎれ続ける」。石川さんは夫の職場である「麹室」を俯瞰するように刻々と描写していく。その石川さんの視線には、蔵人である夫たちとそのリーダーである杜氏が、黙々と酒造りの作業をしていく職人の「あかぎれた手」に、敬意と誇りが込められている。そして蔵人が帰る日である「皆造日」を待ち続けるのだ。石川さんは難病を抱えながら誰よりも精一杯生きていて、その生き方そのものが芸術的だと思えてくる。『蔵人の妻』は第二詩集だが、このような精神性を反復して詩作を続けていけば、石川さんはこれからも多くの人や生きものたちの命を深く見詰める優れた詩篇を生み出せるだろう。

手間をかけて生きることを願っている人びとに、真の強さとは何かを求めている人びとに、病を抱えながら一所懸命生きている人びとに、また健康のありがたさを忘れがちな今は健康だと感じている人びとにも、この詩集を読んで欲しいと願っている。